
魔法VS錬金術

いとうこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法VS錬金術

【Nコード】

N1132U

【作者名】

いとつじ

【あらすじ】

2011年7月24日。日本ではアナログテレビから完全デジタル化されようとしていたとき、地球に宇宙人がやってきた。

宇宙人は地球に魔法と錬金術という2つの技術を与えた。それから、約500年。地球は変わった。錬金術が主体の星となった。一方、魔法は地球ではあまり重宝されなかった。

あり得ない未来の話。

燃えたデブ（前書き）

おれなりの、ファンタジーです。科学的要素はすべて想像で嘘を並べています。誤字脱字も多いと思います。でも、読んでくれたりしたら、嬉しいです。

燃えたデブ

デブが燃えた。

デブというのは、肥えているということだ。目の前で燃えている男に太っているからという理由で僕の中で勝手に付けた安直なニツクネームだ。嫌な奴という意味も込められている。

僕は目の前で起こった出来事を把握できず、デブの顔が燃えている様子を呆然と口を開けたまま見ていた。デブの隣にいたチビは突然の出来事に小さく悲鳴を上げて尻もちをついた。チビというのは身長が小さいことからきている。別に親しみを込めて付けたのではなく、軽んずる意味が込められている。

僕はビルの廃墟にいた。床が汚く、部屋に置いてある机は埃で一杯だった。コンクリートで出来た壁も汚い。暗くて見えなかつたが、部屋の隅には蜘蛛の巣が張られていることは予想ができた。蛍光灯が切れている為、周囲は暗い。唯一に光は放つのはデブの燃えた顔だけだった。デブの顔に火が宿って見えたことだが、壁には落書きが書いてあった。『in eternity everything is just beginning』英語は読めないの意味は分からない。

僕の記憶が正しければ時刻は昼間の二時ぐらいのはずだ。だが、ビルの外は薄暗い。日本の終わりを表現しているようにも見えた。立派にそびえ立っていたビル達は影を潜め、ボロボロのビル達が足元をふらふらになりながら、なんとか立っているという感じだった。その様子は老人の歯の様だった。ヤニで黄ばんで、歯茎がこけた老人の歯は廃墟になったビル達に似ていた。どこかに消えた歯も取り壊されたであろうビルと同じだ。そして、二度と元には戻らない、という悲壮感はそのものだった。恐らくは、魔法が錬金術に対する警告の様なものだろうが、僕には魔法の妬みにしか見えなかつた。

デブは僕が燃やした。

僕は混乱しながらも、悲鳴を上げて燃えるデブの顔を眺めながら三日前のことを思い出す。どうして、こんなことになった。

もうすぐ、500年

三日前、僕は両親とアリエナ星博物館に来ていた。アリエナ星とは、宇宙人が住む惑星だ。今から、約五百年前に宇宙人が地球にやってきた。別に襲来したりしにきたわけじゃない。かといって、ペリーみたいな開国を迫るように任務を持ってやってきたわけでもない。たまたま通りかかったから、そんな理由だったらしい。それが、アリエナ星人だ。

そのアリエナ星人の偶然の地球訪れが、地球を大きく変化させた。アリエナ星人が地球の科学力に驚く場面もいくつかはあったという話もある。だが、アリエナ星の文明は地球の何倍もあり、地球の代表として、アリエナ星人の接待に向かった科学者は『地球はまだ胎児に過ぎなかった。生まれてすらいないのだ。』という名言まで残した。

そして、アリエナ星人から地球への贈り物は地球の文化を大きく変化させた。その中でも代表的な二つの技術がある。それは、錬金術と魔法だ。質量保存則をもとに物質にエネルギーを掛けて自由自在に変化させる錬金術。エネルギーだけを使い、ゼロから物質を作る魔法。どちらも、地球の文明を急速に進歩させた。だが、十年も経たないうちに魔法はマイナー化し、錬金術だけにスポットが当てられた。

やがて、地球は錬金術が発達した惑星になった。元よりあった、人間の科学力を生かせるのは錬金術だった。

世界には『お金』というものが必要ではなくなった。一部の例外の国を除けば、すべては『粒子』という共通の価値観がある。錬金術を邪見とする国も未だにあるが、それは愚かな考えだとされている。錬金術は世界を幸せにするといえば大袈裟に聞こえるかもしれないけど、世界の飢餓や貧困で苦しむ人々を救うことだって出来る。

石油問題だって錬金術が解決した。もう、道路には石油で動く車な

んで、存在しない。すべては、『粒子』をエネルギーとした車だ。
『粒子』は排気ガスもださない。だから、CO2問題も解決させた。
錬金術はエコでもある。どんなゴミもすべては『粒子』に変換され
再利用される。排泄物ですら『粒子』へと変えられ各地に設置さ
れている『粒子貯蓄庫』へと送られ、次への物質に変換されるのを
待っている。

日本では、生まれて市役所で手続きをすれば一週間ぐらいで『ハ
ンディ』というものが与えられる。それで、大抵の国のものは手に
入れることができる。

それは、どうゆうことか。例えば、行列のできるラーメン屋のラ
ーメンも並ばないで食べることができるということだ。ハンディで、
そのラーメン屋を探し、注文をすれば、『スカイリユウシトウ』か
ら『粒子』が電波として飛ばされ、注文者の前に行列のできるラ
ーメン屋のラーメンをそっくりそのままの物質で作ってくれる。そし
て、そのラーメン屋には特許として、『粒子』が手に入る。今では
ラーメン屋にも印税が入る時代だ。

農業だつて必要ない。工場だつて必要ない。国が粒子を管理してい
るので、銀行だつて必要ない。錬金術の登場はあらゆるもの淘汰し
た。そして、世界中の職を奪った。だが、その処置として大抵の国
で毎月一定の『粒子』が支払われるという政策がとられ、未だに続
いている。人は働かなくても食べていけるのだ。

その影響で人々は自由になった。それが、娯楽に労力を費やすこ
とになった。プロスポーツ選手の給料はさらに大幅に上がり、芸能
人希望の若者も増え、放送局は十倍以上に増えて、熾烈な視聴者争
いを繰り広げている。

世界各地を旅する旅人や『パフォーマー』という路上でパフォー
マンスをして粒子を稼ぐ者もよく現れるようになった。働かなくて
も生きていけるのだから、大抵の人々は自由なことをして、生きて
いる。働くことに使命感を覚え働くものも、むろんいる。国を良い
方向へ導いていこうとする政治家だつて、いる。もちろん、心にも

ないことを常に口にする政治家もすっかり存在する。

そんな地球を大きく変化させるきつかけとなった日が今から四百九十九年前のその日だった。二〇一一年七月二十四日。日本では地デジ化という大きな変化を向かえていたらしい。

おかげでその日は学校が休みだった。カレンダーには『アリエナ星人訪問記念日』となっている。

「寒太郎、この物質を色々研究していまの『ハンディ』を完成させたんだぞ。」父がショーケースを眺めながら言った。

「ふうん」僕は自分の右手中指にはめているハンディと比べてショーケースに入っている黒く光る物質と比べる。「全然違うね。」

「ああ、そうだな。」父も同じく左手の薬指にはめた結婚指輪兼ハンディと比べた。

ハンディは普段は装飾として扱われることが多い。それは、紛失防止だったり、盗難防止だったり、持ち歩くのが不便だ、とか色々な意見を参考にして、いまの形になったらしい。人によっては首輪だったり、ピアスだったりと色んな形になっていて、持ち主がハンディにしようとすれば、形状変化が行われ、ハンディになる。

「それにしても・・・」僕は周囲を見渡して言う。「人が多いね。」

「まあな、『来年は五百年だぞ、記念祭』だからな。」

「それなら、五百年きつかりにやればいいのに。」

「人は騒ぐのが好きなんだ。」

「だから、『来年は五百年だぞ、記念祭』なの？」

「そうだ。来年になれば、正規の『五百年記念祭』が行われ再来年は『五百年突破記念』とかが行われるさ。何かしらをこじつけ騒ぎたいんだよ。この国の人間は。」父はたいして興味なさそう顔をしつつも愉快げに言った。

「それにしても喧しいな。」僕はもう一度周囲を見渡して言う。公然の前でいちやつく男女、無邪気にはしゃぐ子ども達、外の五つあるステージではパフォーマーが踊り、ミュージシャンは歌い、研究者は自分の発見した物質を必死に説明していた。

「それでも喧しいのはいいことだよ。これが永遠に続くわけじゃない。死ぬまでの道のりの一つだ。」父が笑う。茶色く染めた髪は細くて柔らかそうで、中性的な顔立ちが実年齢より若い様に見せていた。

「なにそれ？ 自称詩人の言葉？」

「ああ、自称詩人のありがたいお言葉だ。」

その台詞は自嘲気味に放たれたものではなく、誇りに満ち溢れた顔だった。

父は詩人であった。そして、自分が詩人であることに誇りを持っていた。だが、彼の詩は一つも売れた試しがない。というよりも、売ろうとしたことがなかった。いつも、思い付いた詩をおもむろにハンディに書留、「おれが死んだらこれを世界に発表してくれ」というのが彼の言い癖だった。それは決して、生きている間に名を残すのではなく、死んでから名を残すことに美学を感じているという理由からでもなければ、自分が他の人間よりも先に進んでいるという傲慢さから来るものでもなかった。死人の言葉の方が人々は耳を貸してくれる、そんな彼の独特の持論からだった。

「一つも詩を売ったこともない、自称詩人の言葉にありがたみなんでないよ。」

僕がそう皮肉を吐くと父は僕の方に手の平を向けて、胸を張る。

そして、例の台詞を吐いた。

「売れないんじゃない。売らないんだ。その日が来るまでは決しておれの詩は売らない。だから、その日が来たらおまえがおれの詩を売るんだ。」

売れなかつたら恥をかくの僕だ、と反論すると印税はおまえが自由にしていいぞ、と父は笑う。僕が自分の詩に耳を傾けてもらいたいなら、まず人の話しに耳を傾けるべきだと、注意をすれば、人は生きている人間には耳は貸さず、自分の意見を押し付ける傾向にあると、父は例の持論を口にして笑った。

芸術の力

世界的に有名なパフォーマー集団のパフォーマンスを観に行っていた母と妹の愛梨が帰ってきて昼食を食べることになった。

テーブルに座り、各々にハンディを取りだし注文する。父はフランス料理を注文し、母はイタリアン料理のパスタを注文し、愛梨はピザを注文し、僕はハンバーガーを注文した。

各々に違うものを食べながら会話をする。別に不思議な光景ではない。いつもと変わらない日常だった。

「ステージはどうだった？」

父が愛梨に訊ねる。

「よかったよ。あれは芸術の域に達しているね。顔も格好良かったし。」

愛梨はピザを食べながら答えた。

「芸術？」

父が眉を寄せ、鋭い目付きになる。父は自称詩人を語るだけに芸術に対して敏感だった。

「うん、芸術的だったよ。お父さんも来れば良かったのに。ねえ、お母さん。」

「そうだね。世界的に有名なことだけあって、凄かったわね。芸術的だったよ。お父さんも来ればよかったのに。」愛梨に続いて母が言う。

「なんだ、芸術的なものか。」父は興味を失ったようにフランス料理に目を落とした。「芸術的なものは意外と世の中に溢れている。でも、本物の芸術は意外に少ない。」

「なにそれ。」愛梨が目を丸くする。

「自称詩人の新作だ。」僕が横やりを入れる。

「あら、まあ」と母が大袈裟に感心する。

「それに、本物の芸術はほとんどの人に最初は理解されない。」父

が言っ。

「じゃあ、いまある本物の芸術はほとんどの人は理解していないの？」愛梨が心底不思議そうに訊ねた。

「理解している人もいれば、そうじゃない人もいる。もちろん、知識や興味がなければ理解しようがないしね。」

父は何を根拠に言っているのかわからないが自信満々に答えた。

「著者が死んでから作品に価値が付くみたなこと。」僕が言った。

「そうだ。それは何故かわかるか？」父が嬉しそうに答えた。

「時代に合わなかったとか、そんなこと。」

「その通り。本物の芸術はいつも時代の先にある。」

「時代の先？」

僕と愛梨は首を傾げる。母だけが会話に加わらず、紅茶を一人で啜っていた。

「そして、理解するということには、物事を複雑化させるといふことがある。」

「理解？ 複雑？」

「つまり、本物の芸術を理解する境地に至るまでは膨大な時間を必要とするということだよ。」父はナイフとフォークを優雅に扱いつつ言った。

「本物の芸術の良さをわかるには時間が必要ってこと。」

「そうだ。」父は嬉しそうに頷く。「つまり、それはどうゆうことかわかるか。」

「どうゆうことって、どうゆうこと？」

首を傾げる僕と愛梨に父は人差し指を立て、自称詩人の新作を発表した。

「本物の芸術には時代を一つ進める力がある。」

美女の力

『幸福時代』と大きな看板が掲げられていた。二五二〇年、世界には幸せが溢れていると言われている。錬金術が地球に導入されてから人の幸せ水準は大幅に上がった、学校で習ったことだ。「不幸じゃなければ、誰だって幸せだ」父がソファに寝そべりながら芸能人の結婚会見で「幸せです。」と目を合わせる二人に毒を吐いていたのは、たしか二年ぐらい前のことだ。

人の波を縫うように歩きながら、そんなことを思い出してした。別に好んで思い出したんじゃない。勝手に蘇ってきたのだ。手をクネクネと結びながら歩く男女はとも幸せそうな顔をしている。灰色のＴシャツが黒くなるほど汗を掻いている眼鏡を掛けた肥えた男はとても苦しそうだ。父親に肩に乗る女の子は無邪気に笑っていた。「人を一番に幸せにするのは友の不幸だ」とも父が言っていたことも思い出した。あれは確か、昔付き合っていた女性が死んだと連絡を受けたときだった。涙を浮かべながら言っていた。

僕は特に目標もなく館内を歩いていた。母と愛梨はもう一度ステージを観に行き、父も「芸術を探しに行く」と付いて言った。僕も誘われたが、外は暑いから、という理由で断った。

人波を歩くのにも疲れ、扉の上に小さく『魔法』と書かれた部屋に入った。特に魔法に興味があったわけではなく、深い理由はなかった。ただ、人波を歩く以外のことをしたい、と思ったときに扉が目に入ったから、思わず入ってしまっただけだった。

『魔法はとても優れた技術を持っています』

部屋に入った途端に若い女性の落ちついた声が耳に飛び込んできた。そして、異空間に入ったような錯覚がした。

『魔法はエネルギーだけを使い、ゼロからものを作ることができません。』

室内には若い女性の録音されたアナウンスが響いていた。魔法の

説明ではなく、魔法の良いところを箇条書きにした文を一つ一つ読む、そんなアナウンスだった。

「こんにちは。」

スーツ姿に眼鏡を掛けた二十代半ばぐらいの男の職員が僕の存在に気付き嬉しそうな笑顔で駆け寄ってきた。

「こんにちは。」僕は挨拶を返してから、周囲を見回す。「すごい、部屋だね。」

床の黒の大理石が天井に下げられたブラックシャンデリアの光を反射していて、どこか神秘的な空間になっていた。

「これは高級感っていうんだ。」

男の職員は自慢げに言う。

「高級感？」

「最高のサービス、最高おもてなしのことさ。」

「サービス？ おもてなし？」

「気配りのことだよ。昔の日本人の高級ブランド店というのを真似てみたんだ。高級というのは中々手の届かないということだ。」

「手の届かない？」

「きつと彼女のようなものだよ。漠然と欲しいと思っても中々できない。」職員は男は笑う。

「ふーん、でもその割には・・・」と僕はもう一度周囲を見渡す。

「人が少ないね。」

部屋にはこの職員の男と少し美人の女性職員と老夫婦一組と孫らしき四、五歳の少年と僕を合わせて六人しかいなかった。少し美人の女性職員はショーケースの前で老夫婦に説明をしていた。少年は魔法に興味はないのか水を得た魚のように大理石を泳いでいた。泳ぎの型はクロールだった。

「難しいんだ。人に興味を持ってもらうというのは。」職員は男は泳ぐ子どもを見て、顔を歪める。

「まあ、興味のないものほど、つまらないものはないしね。」僕は同感する。だからこそ、興味を持つのは難しい。勉強も同じだ。い

くらゲームで勉強しましょう、と工夫をされても勉強自体がつまらなければそんなゲーム自体に興味を持ってない。

「来年は可愛い女の子でもたくさん集めるとでもしようかな。」と職員の間は言う。美男美女はいつの時代もみんな興味を持っている、と。

「それじゃあ、ただのキャバクラじゃん。」と言いながらも僕は国語のマドンナ教師を思い出した。彼女の気を引こうと授業が終わる度に彼女に質問に行く男子達の光景だ。ゲームは駄目でも、教えてもらうのが美女なら興味よりも下心が先行してやる気が沸くのかもしれない。

「きつと、その方がきつとお客さんはたくさん来てくれるし、喜んでもらえる」職員の男は自分で言いながら「うん、うん」と頷く。

「その方がおれも仕事が楽しくなるし。」と続け「そしたら、おれに彼女ができるかもしれないな。」と勝手に喜んだ。

絶世の美女と絶世の雌犬

「坊主はいくつだい。」職員の方が言った。

「十二歳。小学六年。」

「魔法に興味があるのかい？」職員の方が嬉しそうな顔をした。

「別にないよ。たまたま、入っただけ。」嘘を吐く必要もないと思
い正直に答える。しかし、職員の男はその答えを聞いて顔を曇らせ
残念そうに肩を落とした。その表情を見て、僕はなんとなく後悔し
た。『嘘は希望だ。世の中に正しいことなんかない。』そんな父の
詩を思い出す。友達との約束に寝坊したときにできた詩だ。確か、
娘が風邪で行けなくなった、と電話で言い訳をしていた。

「でも」と少し間をおいて職員の男が微笑む。「せつかくだし案内
するから見て行ってくれよ。」

「うん。あんまり面白そうではないけど。」
僕は断るのは可哀そうだと思い、人助けのつもりで案内されるこ
とにした。

『魔法は世界に幸福を与えます』

機械的な言い方をする女性のアナウンス部屋に響く。部屋にはシ
ョーケース並べてあり、職員の男はアリエナ星人が地球に贈った魔
法関連の物質だと説明した。僕は男の説明に「へえ〜」や「なるほ
ど」と適当に相槌を打った。

『魔法は世界を裏切りません』

「まほうはせかいをうらぎりません」と男の子がアナウンスを真似
て叫んだ。自然と男の子に目がいく。さっきまで泳いでいたのに飽
きたのか今度は野に放たれた犬の様に走り回っていた。

「実際の魔法を見たことある？」職員の方が訊ねてきた。僕が首を
横に振ると「魔法つてのいうは無から物質を作るんだ。すごいだろ。
」男の職員があたかも自分が魔法の製作者のように自慢げに言った。
「でも、魔法で生みだせるものは錬金術で作れる。」

「でも、魔法は機械を使わずとも誰でも物質を生み出せる。」

「嘘だ。そんなことできるはずがない。」

「いや、できるんだ。」男の職員はそう言って拳ほどある二つの赤い石をハンディから取り出した。

「本当は魔法の時間は錬金術を使用するのは禁止なんだ。」と苦々しく笑う。

「なんで？」

「魔法と錬金術は仲が悪いんだよ。」

「仲が悪い？」

「正確に言えば魔法協会が一方的に錬金術協会を嫌っているんだ。」

「なんで？」

「簡単なことだよ。錬金術の方が優れていて、皆に人気だからだよ。君だってそうだろう。自分より格好いい男の子が女の子からチラホラされていたら、いい気分はしないだろう。」

「さあ、そんな考えは自分を惨めにするだけだと思っけど。」

「はは、君は子どもだな。」職員の男は鼻で笑った。

「人の才能に嫉妬する方が子どもだと思っけど。」間髪入れず反論する。鼻で笑われたことが少し癪に障った。

「その嫉妬が人を成長させるんだ。そして、その嫉妬はできる奴を優越感に浸らせ幸福にさせる。大概できる奴は負けず嫌いだ。けど、腕の悪い画家は互いの絵を褒め合う。それで満足して終了だ。一向に成長しない。」

「でも、嫉妬の程度が過ぎると自棄になって犯罪に走る馬鹿だっている。」

「それは愚かな奴だけだよ。優秀な奴は自棄になったりはしない。

緻密な計画を立てコツコツと努力をする。」

「じゃあ、魔法は錬金術に勝とうと緻密な計画を立てて努力をしているわけ。」

その問いに職員の男は顔をほころばせた。そして、見てるよ、といくぶん興奮した顔付きになって石同士を勢いよくぶつけた。すると、

目の前にサッカーボールほどの火の玉が現れた。そして、すぐに消えた。

「どうだ？　すごいだろ。」職員の方はニヤリと言った。どこことなく達成感のようなものを滲ませた表情をしている。

「まあ、すごいといえば・・・すごいけれども・・・」これが錬金術に勝つ魔法の緻密な計画なのか、となじったり、呆れたりするよりも気まずさがあった。おれの歌は最高だぜ、と豪語していた友人が歌うと今一だったのでコメントに困る。それなに、友人は感想を求めてくる。そんな気まずさだ。でも、僕の目の前にいる男は友人でもないの、なぜ自分が気まずくならなければいけないのだ、と腹が立った。なので、最終的には「錬金術ならタッチ一つで火ぐらい起こせる」となじった。

「それは、この星が錬金術仕様にカスタムされているからだよ。このすごさをわからないのは錬金術に慣れ過ぎているからだ。」

「なにそれ？　ただの言い訳じゃん。」

「違う。根城が違いすぎて比べることができないだけだ。」

「根城？」

「同じ距離を泳ぐとして、川上に向かって泳ぐ人と川下に泳ぐ人間はどっちが速くゴールに辿りつくと思う。」職員の方は突然、突飛なことを言った。

「それは川下に向かって泳ぐ方が速く泳げるでしょ。」

「そうだろ。君はそうゆう偏った比べ方をしている。」

「なにそれ？」

「絶世の雌犬と絶世の美女、結婚するならどっちがいい？」

「そりゃあ、絶世の美女でしょ。そして、絶世の雌犬はペットとして絶世の美女と一緒にペットにするよ。」

「君はそうゆう比べ方をしている。」

「だから、意味がわからない。」

「基準が違うんだ。世界は粒子化して錬金術を生かせることのできる世の中になっている。でも、魔法を生かせるような世界になれば

立場が逆転する。川上に向かって泳いでいた人間が川下を泳げば当然勝つし、雄犬にさっきの質問をすれば雌犬を選び、やっぱり、美女を飼い主に選ぶ。でも、プールで競えば勝敗はわからないし、猫に選ばせれば答えはわからない。それと同じだ。魔法は圧倒的な不利な立場にいるも関わらず、君はそんなことも考慮しないで、魔法の負けだと決めつけている。」

「でも、結局は錬金術に勝てていないってわけじゃん。勝敗を判断するのはこの世界に住む人間なんだから。」

「それだけで、魔法の負けだと判断するのは短絡的だよ。それに、いまのは魔法の初歩的なものだから。あれを現代の錬金術と比べられては困る。」職員の名は片眉を下げた。

「初歩的？」

「魔法の基本中の基本の魔法だよ。RPGで譬えるならばよぶよのモンスターと魔王を比べるようなものだ。」

「木の棒と伝説の剣を比べるようなもの？」職員の名に合わせる必要もなかったが、思い付いてしまったので、口に出さずにはいられなかった。

「そうそう。」と職員の名は僕を指差す。

「それに魔法は錬金術に勝つ為に今も緻密な計画をコツコツと努力をしている最中なんだ。」

「ふうん、先は長そうだね。」

「まあね。」と職員の名は愉快そうに笑った。「でも、いつかは逆転するとおれ達は信じているんだ。」

「なにを根拠に？」

「時間は前に進む。」

「・・・だから？」

「だからさ。世界は変わるし、人も変わる。魔法だって発達するし、まあ、錬金術も発達するけど、魔法の時代は必ずやってくるよ。だって、魔法が錬金術に劣っていたわけじゃないんだ。時代が魔法を使いこなせなかったただけだからね。」

「そんな漠然と言われてもなあ。」

ラクダと白クマの嫌悪感

「時間を操ることができたら、世界は魔法を選ぶと思うかい？」職員
員の男は真面目な口調言い「なにを持って世界は錬金術を選んだと
思う？」と僕に問い掛けてきた。

「やっぱり便利さとか、そんなところじゃないの？ 地球の科学と
錬金術は似ているところもあったし、なにより魔法より元来ある科
学を生かせるのは錬金術だったといわれているじゃないか。」学校
で習ったことをそのまま口にした。テストだったら模範解答に選ば
れても悪くない解答のはずだ。だが、職員員の男はその回答を聞いて
噴き出した。

「違うよ。そんな単純なはずないだろ。」職員員の男は笑う。

「でも、学校でそう習ったけど。」

「学校は真実を教えない。錬金術は正しいものだと思い込ませる場
なんだ。」

「学校は嘘を吐いているの？」

「さあ、嘘かどうかはわからないけど、誠実さはないことは確かだ
よ。」

「誠実さ？」

「この星の人間はさ、錬金術と魔法という二つの技術が手に入った
とき、何をしようとしたと思う？」

「世界を便利にしようとしたんじゃないの？ 『人々を幸福にする』
それが今の日本のスローガンだし。」

「全然違うよ。当時の人々は神を目指したんだ。」

「神？ あの神様？」

「馬鹿だろ？」職員員の男は微笑んだ。

「馬鹿だね。まず、神という定義がわからないし。」

「人間はこの二つで宇宙を掌握できると思ったらしいんだ。その為
にまず人間が最初にしようとしたことは何だと思う？」

「さあ、宇宙に向かって街頭演説でもしようと思ったんじゃない。」
職員の男は僕のジョークにピクリとも笑わなかった。

「人間を作ろうとしたんだ。」

「人間？」

「セックスをしないで、子宮も使わないで、だ。」

「なにそれ？」

「粒子で人間を作るんだ。理論上は可能だし、そんなに難しいことじゃない。記憶だって簡単に作れるし、医療では臓器を作ることが錬金術が地球にやってきて真つ先に行われたことだ。」

「でも、無理だった。」

「その通り。錬金術で人間を作ることはできない。いや、まだできない。まだ、人間を解明できない部分の一つだけあるんだ。」

「魂と呼ばれるもの。」

「おお、よく知っているね。」職員の男は感心した顔を見せた。「人間が自分は自分だと認識する部分。例えば『青の色を青』と認識する部分が未だにわからないんだ。」

「じゃあ、未完成の人間なら錬金術で人間は作れるの？」

「それも無理だ。人形なら作れるけど、動く人間は作れない。」

「そうなんだ。」

「そこで、だ。」と職員の男は言った。「その次に神を目指す人間達が目を付けたのが魔法だ。」

「魔法？ 魔法で人間を作るの？」

「いや、魔法で人間は時を操ることを試みたんだ。」

「時を操る？」

「意味がわからないだろ。」職員の男は顔をほころばせる。「面白いだろ。時を操れば神になれる。そんなことを考えていたんだ。」

「うーん、わからなくもない気もしないけど。」と僕は言ったが実際には理解はしていなかった。時間を操るなど、僕のイメージシヨンを遙かに超えていた。

「それで、だ。」職員の男は、また言った。「これが、実際に研究

されていた物質なんだ。」

職員の男は一つのショーケースを指差した。青く不気味に光る石だ。

「不思議なんだ。綺麗と呼ばれてもいいはずの美しさがあるのに、何故か不気味に見える。」職員の男がショーケースに寄りながら言った。僕もその後ろからショーケースに近づく。

「でも、理由はある。」

「理由？」

「この石はとんでもないエネルギーを持っているんだ。」

「エネルギー？」

「さっき見せた、あの石と同じだよ。さっきの石も高いエネルギーを持っているから、叩くとエネルギーが発生する。そこから物質を作るのが魔法だ。」

「へえ、そうなんだ。」

「最初に説明したんだけどね。」職員の男は苦笑する。「君はずっと上の空だったから、やっぱり聞いていなかったんだ。」

「正直に言えば全然興味を持っていなかったから。」

職員の男は僕をじっと、観察をするかのように見た。無言のまま。「とんでもないエネルギーってどれくらいなの？」

「この石はね。」と職員の男は僕の台詞を右から左に流すように、唐突に静かな口調で言い出した。

「この石はね、アリエナ星人から地球に贈られた物で、一番価値のある物らしいんだ。」

「へえ。」

「アリエナ星人って名前はどいう意味かわかるかい？」

「あり得ない。そうゆう意味でしょ。」

「相手は宇宙人だ。言葉も通じない。文化も違う。きっと、ラクダと白クマが吠え合うようなやり取りだったんじゃないかな。」

「人間には知能があるんだし、もうちょっと賢いやり取りだったと思うけど。」

「その最後にこの石は渡されたんだ。そのときのアリエナ星人の表情は至極真剣だったらしい。『厳重に保管しておいてほしい』そんなニュアンスで贈られたらしんだ。」

「ふうん、初耳だな。」

「一説にはこの石を渡す為に地球にやってきたという説もある。」

「なんの為に？」

「さあ、白クマの考えることをラクダが理解できるわけがない。文化も言葉も違うんだから。」

「白クマは飢え死をしない為に、同じ白クマの子供を狙うことも珍しくないらしいよ。」僕は意味なく雑学を披露する。

「へえ、そうなんだ。」職員の男は感心する顔を見せる。

「だから、白クマの雌は子育てのときは雄を恐れて、すごい警戒をしているんだ。」

「ラクダの背中のごぶの中にはエネルギーを蓄える脂肪が入っている。水を数日飲まなくなつて生きていける。」今度は職員の男が雑学を披露する。

「そんなこと誰だつて知っている。」

「そうか。」職員の男は残念そうな表情をして「でも、やっぱり全然違う生き物だな。」と呟いた。

「でも、なんでこの石で時を操れるの？」

「アリエナ星人がそんなニュアンスで説明したらしいんだ。」

「本当に？」僕は眉をひそめる。

「さあ、都合良く考えているだけだと思っけどね。」

「都合良く、か。」

その言葉が僕の記憶を蘇らせた。

「アリエナ星人の名前の由来を知っている？」

今度は僕がその質問をした。職員の男は虚を衝かれたように、きよんとした顔になる。

「『人はありえなさそうなことは信じないけど、ありえないことは信じる』」

「なんだい、それは？」

「知り合いの自称詩人の言葉だ。現実味がない方が逆に人は信じる傾向にある。そんな意味だと思うよ。」

「ふーん、それはあれだね。」と職員の男は少し考えるような素振りを見せてから言った。「サッカーに対する知識もないくせにブラジルに日本が勝てるは無責任にインタビューに答える呑気なファンだ。」

「そうなのかな？ 少し違う気がするけど。」

「きつとそうだ。ブラジルの強さを知らないから希望が持てるんだ。本当のサッカー好きなら、そんな愚直なことを考えられない。」

「うーん、やっぱり違うような気もするけど、まあ、似たようなものなのかな。」

「きつとそうだ。そうに決まっている。」と職員の男は何か確信を得たように言った。「きつと、神に対する知識も魔法に対する知識も時に対する知識も、なんの知識もない人間達が能天気考えたに違いない。」

僕は職員の男が何をそこまで憤怒しているのかは、理解できなかつたが、人間が神になろうとしているということに対しては嫌悪感を抱えることには共感できた。

安否

「未だに、研究は続いているんだ。」職員の方が苦虫を噛みつぶしたような顔で言った。

「時間を操る研究のこと？」

「そっちもそうだし、錬金術も。」

「人間を作る研究？」

「ああ、吐き気がするだろ。」

「吐き気はしないけど、人間が神になろうとするのは傲慢な気がするな。」

「ああ、そうだろ。そもそも神なんて必要がないんだ。」職員の方は不快そうに吐き捨てた。

「うん、その通りかもしれない。」

「おれはもつと、この石には別の意味があると思うんだ。」

「別の意味？」

「この石は錬金術でも作ることができないんだ。」

「え？ そうなの？」

「ああ、すごいだろ。」職員の方は目尻に皺を作った。

「それは、すごい。」それは心の底からの驚きの声だった。僕は今まで、錬金術で作れないものは世界でないと思っていた。なので、職員の男の発言は衝撃的で、疑わしいことでもあった。

「これは本当にすごいんだ。」職員の方は自慢げにもう一度言う。

「でも、本当に錬金術で作れないの？」

「ああ、解析ができていないし、それよりも、この高エネルギーを再現するのは不可能だとされている。」

「高エネルギー？」

「恒星って知っているかい？」

「太陽のこと？」

「そう。それくらいの高エネルギーを持っているんだ。だから、地球

では作れない。」

「へええ、よくわかないけど、すごいんだ。」

「ああ、とにかくすごいんだ。」

職員の男は石を見て、幸せそうな顔をする。僕もそれを見て、この石のそれだけの価値があるのかショーケースに顔を近づけて、石を観察した。

青く不気味に光っている。太陽と同じだけのエネルギーを持っているとは、どう考えても信じられなかった。もう少し、ショーケースに顔を近づけようとしたとき、お尻に衝撃が走った。その、瞬間顔にも衝撃が走った。僕の顔が石の入ったショーケースにめり込んだのだ。そして、ショーケースを突き破り、僕は床に倒れ込んだ。「きやあああ」少し美人の女性社員の悲鳴が室内に響くのがわかった。僕の目の前に青く光る石が転がっているのがぼやけて見える。だが、それよりも鼻にジンジンと重い痛みがある方が気になった。割れたショーケースには血が付着している。すぐに自分の血だとわかった。鼻血が出ていた。

後ろで男の子の泣き声が聞こえる。僕にぶつかった衝撃で驚いて泣いているのだろう。

「大丈夫だ。石は割れていない。」職員の男の声が聞こえた。どうやら、僕の安否より、石の方が心配だったらしい。それじゃあ、さっきの女性の職員も石の安否が不安になって叫んだのだろうか、と気になった。だが、僕の意識が少しずつ遠くなった。

壮大な詩

目を覚ますと僕は自分のベッドの上にいる。上半身だけ起こし、自分が何故ベッドの上にいるのか違和感を覚え、そのことについて考える。そのとき、声が聞こえた。

「こんにちは。」

若い女性の声だ。元気のある声だった。

ドアに目を向ける。だが、誰もいない。後ろを振り返る。が、誰もいない。

「大丈夫？」

もう一度聞こえた。今度は心配そうに訊ねる感じだった。

急いでベッドから飛び出し部屋のドアを開ける。だが、誰もいない。

「あの〜、お願いがあるんだけど？」

同じ声だが、今度は遠慮がちな声が聞こえた。僕は怖くなり、急いで部屋を飛び出して階段を降りた。リビングのドアを勢いよく開く。すると、父がソファでくつろぎながらテレビを見ていた。

「おお、起きたか。たいへんだったな。」

父は言葉とは裏腹に嬉しそうな顔で言った。「不幸は大切だ。不幸があるから人は幸せを感じられる。」

「なに呑気なこと言ってるのよ。」

食卓テーブルに座っていた愛梨が立ち上って冷ややかな目で父に見る。「大丈夫。どこか痛いところない？」

「ああ、うん。大丈夫、大丈夫。それより・・・」

僕はそれよりもおかしな声が聞こえたことを報告しようとしたが愛梨が僕の声を遮った。

「本当に？ 鼻から血が出ていたんだよ。気も失っていたし。」

愛梨は僕の顔を覗き込むように観察する。

「気を失っていた？」

言葉に出して聞き返す。気絶したという実感はなかった。

「そうだよ。たいへんだったんだよ。」

愛梨が眉をひそめて言う。

僕は自分の身に何があったのか、記憶をゆっくり呼び起こす。そして、ショーケースに頭をぶつけて鼻血を出したことを思い出す。そうか、僕はあれで気絶したのか。それは大変であり、貴重な体験だ。

「ああ、たいへんだった。」父が頷いた。

「嘘よ。お父さんとお母さん、お兄ちゃんが倒れて、たいへんだったのに、呑気に男の人楽しそうに笑っていたじゃない。」

愛梨が目を見詰めて声を荒げた。

「寒太郎」父が僕を呼ぶ。「あの、山谷さん、面白いな。」父が顔をほころばせて言った。

「はあ」僕は首を傾げる。「だれ？ 山谷さんって？」

「あの魔法エリアを担当していた男の職員さんだよ。」

「男の職員？」口に出して思い出した。思い出されるのはあの一言だ。『大丈夫だ。石は割れていない。』別に恨みを持っているわけではないが、愉快とは言い難かった。

「人生山あり谷ありの山谷です。」父は笑いを堪えながら言った。

「なにそれ？」

「山谷さんがおれに向かって最初に言った台詞だよ。」

「人生山あり谷ありの山谷ですって？」

「ああ、その後に息子さんか気絶してしまいましたって。」

「他人事のようにね。」

愛梨が不快そうに言った。

「でも、いいじゃないか。山谷さんは寒太郎のハンディ番号からおれ達に連絡してくれたんだから。」

「でも、あの人全然悪びれる様子もなかったじゃない。」

「ああ、堂々としていた。」

父は何故か誇らかな顔で言う。

「それが気に入らないのよ。もしも、お兄ちゃんが重傷だったらどうするのよ。」

「大丈夫だよ。そのときはそのときだ。山谷さんがおどおどしていたところで寒太郎の怪我の重さは変わらないし、逆に堂々とされた方がこつちも安心する。」

「でも、いきなり自己紹介することないじゃない。」

「陽気でいいじゃないか。いきなり、『息子さんが怪我しました』って驚かされるより、陽気な空気で言われた方が受け止めやすいだろ。」

「逆に受け止めにくいわよ。これはもつと、深刻なことなのよ。」

「大丈夫だよ。寒太郎は生きているんだから。」

父は平然な顔で言う。

「だから、もしものことがあったらどうするの？」

「だから、そのときはそのときだ。」父は開き直ったように言う。そして、一向に怒りが収まらない愛梨に「いいことを教えてやる。」と間を置いた。

「どうせ、くだらない詩でしょ。」

愛梨が冷ややかな目で口を尖らせる。

「生きてこの世界は出られない。」

「なにそれ？」

愛梨がぼかんとした顔をする。

「安心しただろ。」父が笑顔で言う。「寒太郎。」

「なに？」

「お前はそこにいるだろ。」

父の口調は軽やかなものであったが、何故か重みのあるような言葉に聞こえた。

すぐには理解できず、咄嗟には父が何を言っているのか分からなかった。生きていることを確認されているのだ、と理解して、「父さんにおれの足が見えているなら心配ないと思うけど。」と遠回しな質問に遠回しな回答で返す。

「見えるさ。大丈夫だ。お前にはしつかりと二本足が生えている。それでいいじゃないか。」

「生きているから良しとしようなんて、雑だし、乱暴な考え方よ。」
愛梨が不満そうに顔で言った。

「乱暴なんかじゃない。ただ、自分は少し運が悪かったと考えればいいことだ。難しいことじゃない。」

「運が悪い？」

「ああ、この世界で一番大切なものを寒太郎には少し欠けていた。ただ、それだけの話だ。」父はあっけらかんと言った。

僕は最初に運が一番大切というのは少し違和感を覚えたが、改めて考えると意外としっくりきた。自分の努力ではどうしようもないことはいくらでもある。生まれた瞬間に決められたハンディキャップも言ってしまうえば運の良さによって決められていると考えていいかも知れない。人によって自分を幸福にするものの優先順位は違ってても、それを満たすには運の良さも多少必要になってくるはずだ。だが、それは自分にはどうしようもないこともあるから諦める、と言われているような気がした。

「人生諦めが肝心ということ？」

「違う。」父が強い口調で僕の言ったことを否定した。「切り替えが大切だと言ったことだ。」

「切り替え？」

「カードゲームだよ。自分の身に起こることは運の良さによって決められる。この世界に残っている人間がすべきことは、その中から配られた手段で、どう切り抜けるかが大切なんだ。」

「・・・カードゲーム？」

「カードが配られなかったらお終いだが、カードがある時点ではまだ手段は残っているということだ。もちろん、カードを捨てて、世界から飛びおりのことも手段の一つだ。」

「もう、いいわよ。意味わかんない。」

愛梨はふて腐れるように言った。そして、僕の腕を引っ張る。「

意味わかんないから、ゲームでもしよう。」

「意味がわからない？」父が顔を歪める。

「いちいち、言い回しが回りくどいのよ。話しも長いし。」愛梨が父に向かつて言い放つ。

父はそれを聞いて困ったように眉毛を下げた。そして、少しだけ間を空けて口を開いた。

「寒太郎、愛梨。」と僕達の名前を呼ぶ。

「なに？」反応したのは僕で、愛梨はほぼ無視をした。

「おれが喋るには意味があるんだ。それが、どんな意味かわかるか？」

「さあ、わからないけど。」僕がそう答えた後に「意味なんかないわよ。ただ、二酸化炭素を無駄に吐いているだけよ。」と愛梨が毒を吐いた。

「世界の誰もこの行動は世界に響くんだ。」父は言う。「誰かが落し物をする。持ち主が落としたことも気付かないぐらいいたいして価値のないものだ。それを誰か拾う。それだけで、その二人は気付かぬうちに繋がれている。そうやって、世界は響き合っているんだ。」

「面白い考えだね。」僕が言う。

「気付かない繋がりにって、意味ないし、繋がりともないんじゃないの？」愛梨は呆れた顔をする。

「気付かない繋がりに、思いもよらないところで、気付いたりしたときには人は感動を覚える。」

「なにそれ？」

「例えば、だ。さっきの落としたものがキーホルダーで持ち主が男だったとする。そして、拾ったのが女だ。女はなんとなく、そのキーホルダーを気に入って鞆に付けていたとする。その二人が合コンで出会ったらどうだ。そのことに気付いた二人はそれを『運命』と呼ぶだろうな。」

「ただの妄想じゃん。」

「ああ、これは妄想だけど、事実は小説より奇なりって言葉がある

くらいだ。こんな妄想より奇妙な話はきつとある。」

「なにを根拠にそんなことが言えるわけ？」愛梨が言った。喧嘩腰で挑戦的な言い方だった。

「歴史が語っているんだから間違いないよ。歴史は一つの詩なんだ。」父は喧嘩腰の愛梨を軽やかにかわすかのように微笑んで見せた。

歴史は一つの詩だと父はよく言う。時間が人間を材料に作った規模の大きい詩だと。僕には全く理解ができないが、同じ詩人として親近感が湧くのか父は歴史をよく勉強していた。

「理屈になってないわよ。そんなの。」愛梨が嘆くように言った。

「それで、父さんが喋る理由は結局のところ、どんな理由なの？」

僕がそう言うと、父はよくぞ聞いてくれた、といわんばかりに、にんまりとした表情を浮かべた。

「伝染だ。おれという存在をこの世界に伝染させる為におれは喋る。」

「伝染？」

「誰もがウィルス性の自分というものを持っている。それをより多く他人に移した人間が勝ちだ。」

父は饒舌にテンポ良く喋る。

「だが、ときには移されることも必要だ。自分を持ちすぎると世界が狭くなる。その中でも一番大切なのは、考えることだ。それを放棄した人間は新しい世界に飛び込むことができなくなる。」

「はあ。」僕は意味がわからないので首を傾げる。

「世界はそうやってできているんだ。誰もが病気みたいな自分という何かを移しあっている。それで時間が歴史という壮大な詩を作るおれはその詩に大きく貢献したい。」

父は視線をどこか遠くに向けた。それは百年先なのか、千年先なのかはわからなかったが、未来を見つめているように、僕には見えなかった。

「そんなの傲慢な人間の考えだよ。」愛梨は哀れんだ目で父を見た。だが、父は「人間は自惚れるべきなんだ。」と胸を張った。すると、

愛梨は「何を根拠にそんなことが言えるんだか。」と呆れていた。

僕は、そんなやり取りを見ていたら、幻聴が聞こえたことなど、嘘のように思え、どうでもよくなっていた。ようするに、二人に話すのが面倒になり、自分の中でなかったことにした。

名馬の謙虚さ

ところが、嘘ではなかった。朝になると僕が起きるのを見計らったように『おはよう。』と再び若い女性の声が聞こえた。

僕は急いでドアに視線を向ける。だが、やっぱり誰もいない。

『落ちついて聞いて。』若い女性は慌てて言った。『わたしも考えたのよ。』

これは内なる自分ではないのか、と僕は考えを巡らせた。だが、『違うわよ。』とすぐに若い女性の声が聞こえた。

「えっ？」

『わたしはあなたの考えていることがわかるの。』

「えっ？」

『わたしは唯子。あなたに住んでいるの。』

唯子と名乗る声の持ち主らしき女性が言った。初めは意味がわからなかった。

「住んでいる？ なにが？」

『わたしはあなたに住んでいるの。』

僕は言葉を失った。住んでいるという意味を自分なりに解釈してみる。住んでいるというのは暮らしているということだ。でも、許可もなく住むというのは、住みついていていと言った方が正しい気がした。まるで、ゴキブリだな、と思う。

『ちよつと、ゴキブリって失礼じゃない。』唯子が怒った。

いや、ゴキブリの方がいくぶんマシではないのか、と思う。

『ちよつと、ちよつと、あんなに考えているの。』唯子が慌てて怒った。

「なにが目的でおれに住みついたんだ。」僕が訊ねる。

『別にわたしもあなたに好きで住んでいるわけじゃないわよ。』唯子がへそを曲げた。『わたしとゴキブリを一緒にして、さらにはゴキブリの方がマシって、信じられないわ。』

「おれだつて信じられない。」

本当に信じられなかった。いや、信じていなかった。何かの間違
いだと思つていた。

すると、ドアが開いた。

「何が信じられないの？」

愛梨が心配そうな顔で僕を見た。寝起きなのか、パジャマ姿のま
まだつた。細くて軟らかそうな長い髪の毛は乱れていた。父に似て
端正な顔立ちをしているせいか、どこか様になっている。

「えっ？」

「信じられないって独り言が聞こえたけど？」

「ああ、いや。」と僕は頭を掻く。「夏休みなのに学校に行かなく
ちやいけないなんて、信じられないな。」と僕はお茶を濁した。こ
れは咄嗟に考えた言い訳でもあったが、本心でもあった。僕達の学
校では明日から始まる夏休みに解放されるプールの説明について、
今日学校に行く必要があった。

「うん、まあ、そうだよな。こつゆう説明は夏休み前に済ませてお
いて欲しいよね。」

「ああ、確かに。」

「でも心配しちゃった。」

愛梨が安堵の表情を浮かべて言った。

「なにが？」

「昨日、あんなことあったから、後遺症で頭がおかしくなったのか
なつて。」

『後遺症』という言葉に僕は動揺した。そうか、僕はあの影響で
少しおかしくなっているのかもしれないな、と思う。

「だ、大丈夫だ。後遺症なんかあるもんか。あつたとしたつて後遺
症なんか退治してやる。」

少したじろぎながらも僕は自分に言い聞かせるように言った。

「退治？」

「ああ、ゴキブリを退治するように退治してやるんだ。」

ゴキブリを駆除するスプレーを想像する。意外に洗剤でもゴキブリは倒せる。だが、姿が見えない奴をどうやって倒せばいいのだろうか。途方に暮れる思いを巡らせる。

「ゴキブリを退治？ やっぱり、お兄ちゃん変だよ。」

愛梨は再び心配そうな顔を浮かべて顔を覗き込んできた。顔が小ぶりで目が大きく、まつ毛の長い顔が近づく。兄の鼻肩目抜きに愛梨の外見は人並み以上だ。一つ学年が上の僕のクラスでも愛梨のフアンだと言う人間はいる。それは、男子に限らず、女子もいる。そして、兄の体調を心配することのできる、よくできた妹だ。

「たぶん、大丈夫だよ。」僕がそう答えたと同時に父が部屋に入ってきた。

「おはよう。」

まだ、眠り足りないのか、目を細め、ダルそうに声だった。

「眠いならまだ寝てればいいのに。こんな朝早くから何の用？」

愛梨は嫌悪感を隠さず父に言う。愛梨の短所を挙げるとすれば、それは父親に対して手厳しいことだ。

「おれは寒太郎に用があつて、寒太郎の部屋に入ったんだ。」

父は目頭に付いた目やにを擦りながら言った。

「あつ、そう。でも、お兄ちゃんわたしと話しているの。用があるなら順番を守るか、わたしに断りを入れてからにしてくれないかな。」

父は愛梨の意地悪に困ったように眉毛を下げた。そして、一つ咳払いをした。「それじゃあ、愛梨さん。ちょっとお兄さんとお話が見たいのですが、よろしいですか？」

「嫌よ。」愛梨がそっぽを向いた。

「嫌かあ。残念。それじゃあ、並ぶとしよう。」

父は潔く身を引いた。そして、愛梨の後ろに並ぶと「この列は何分待ちなんだい？」と愛梨に訊ねた。その顔は不愉快そうでもなく、面倒くさそうでもなく、純粹に娘とのやり取りを楽しんでいるようだった。

「お父さんの寿命と同じよ。」愛梨が冷たく言い放つ。

「それじゃあ、おれは息子と人生を掛けても話すことはできないのか？」

「そうね。残念な人。」

「でも、息子とは話せなくても娘と話せる。」

父が微笑んだ。だが、「そうなのかな？」と愛梨が言った。

「お父さんがそう思っているだけで、実はそうじゃないのかもしれない。」

「えっ？」父が目を丸くする。「どうゆう意味だ？」

「実はお父さんの子どもじゃないのかも知れない。」

愛梨が意味あり気に微笑んで見せた。

だが、父が突然、嘔き出した。爆笑をしてベッドに手を叩いた。

「な、なによ？」

愛梨は父の不意の爆笑に少しのけ反いた。

「それはないよ。愛梨の優れた容姿は間違いなくおれから引き継いだ遺伝子だ。」父が自信満々に言った。

愛梨の顔が歪んだ。一面に咲く花が急に萎れたような、そんな感覚を僕は覚えた。「それが嫌なの。その嫌みたっぷり余裕と自信わたしはお父さんのそのずうずうしさが嫌い。」

父の表情が苦々しくなった。さすがに面と向かって娘に「嫌い」と言われるのは精神的に堪えたのかもしれない。

「おれは別にずうずうしくはない。おれの自信は周りの評価が与えた物だし、周りのことも考えている。『礼も過ぎれば無礼になる』だ。謙虚になつて相手に迷惑を掛けるなら、堂々としておいた方がいい。」

苦しい言い訳だと、僕は思った。だが、父はまだ口を開いた。

「いずれ愛梨だつてそう思う日は来る。これから愛梨は経験するんだ。自分のずば抜けた容姿が相手にどんな反応を示させるかという知識を得て、どう振る舞うべきかという知恵を身に付ける。そうすれば、おれの言うことわかる。」

父はそう言うと言いつと部屋を出て行った。結局のところ、用事とは何だったのだろうかと思いつたが僕もそれどころではなかった。『面白
いお父さんね。』唯子の愉快そうな声が頭に響いた。

「自称詩人のくせに、『実るほど頭の下がる稲穂かな』ってことわざも知らないのかしら。」愛梨は父の消えた廊下に向かつてぼやいた。

「なにそれ？」僕は愛梨の言ったことわざを知らなかった。

「中身のある人ほど謙虚だっていうことわざ。」

愛梨が呆れたように言った。

「そうなんだ。でも・・・」僕はなにかないかと頭の中の引き出しから捜した。そして、見つけた。「『名馬に癖あり』とも言っじやないか。」僕なりの精一杯のフォローだった。

だが、愛梨は「癖がありすぎよ。」と吐き捨てた。そして、「それにお父さんは名馬でもない。」とも首を横に振る。

それを言ったら元も子もない、と思つたが面倒くさくなつたので「そうだな。」と僕は首を縦に振つた。

班長の役割

唯子は鏡には映っていない。姿形がない。見えない。そして、うるさかった。

『ねえ、ゴキブリと一緒にしたことは許してあげるわ。だから無視をしないで。』

僕は唯子をどう受け止めていいのかわからず、ただ戸惑っていた。唯子の存在と正面から向き合い共に過ごすのか、それとも目には見えないのだから何も無いのだと開き直って無視をするのか。僕はとりあえず後者の方がするべき手段として、正しいような気がして、無視をした。

『無視しないでよ。わたしのこと見えるのはあなただけなんだから。』
僕にも見えない、と言いたいのを我慢する。だが、唯子には伝わってしまう。

『見えなくても声は聞こえるでしょ。わたし、あなたとしか話すことできないんだよ。それってすごく寂しいと思わない。』

唯子が僕に訴えかける。

『あなたに無視されたら、わたしはひとりぼっちなんだよ。ひとりぼっちってすごく寂しくて、怖いんだよ。』

唯子が寂しそうに言った。僕はさすがに動揺する。

動揺しながらも、朝食を済ませ、顔を洗い、歯を磨いてから外に行くと修二が家の前にいた。家の近い者同士が学校に集団になって行く、登校班というものがあつた。それは、下級生が無事に学校に辿り着く為にあるのか、上級生に下級生を見張らせ責任感を持たせることが目的なのか、僕は知らないがその集合場所が僕の家の前にあるというのはいがたかつた。

「おゝす。」身長が高く、天然パーマ気味の髪の毛で眼鏡を掛けた修二は玄関から出てくる僕に気付くと笑顔で大きく手を振った。オ

「バーアクションとも言える手の振り方はひょうきんな仕草だった。おはよう。」

あんなに大きく手を振ってくれた修二には申し訳ないが、僕は普通に返す。

「浮かない顔だね。どうかした？」

「いや」と口に出した後に言葉を選んだ。「学校が面倒だなと思い」と誤魔化す。奇妙な声が聞こえるとは言えなかった。言ったところで誰も信じないし、哀れな顔をされるのは容易に想像できた。

「そうなんだ。でも、テンション上げて行こうよ。久々の学校だよ。」

「まあ、そうだね。」

「あっ、そうだ。今度、野球しようよ。おれ上手くなったんだ。フライだって三回に一回は取れる。」

「いいね。やろう。」

たわいもない会話をしていると愛梨が玄関から出てきた。

「愛梨ちゃん、おはよう。」修二は先程同様に大きく手を振った。

愛梨は少し戸惑ったものの愛想笑顔を浮かべて「おはよう。」と小さく返した。

「それはなに？」僕は不思議に思い訊ねる。修二は夏休みに入る前までは、こんな挨拶をする男ではなかった。どちらかと言うと、朝の挨拶をするのもどこか照れくさそうにする男だったはずだ。

「いや、おれ班長じゃん。」修二が照れくさそうに言う。この登校班に六年は僕と修二だけだったので、修二が班長、僕が副班長だった。これは阿弥陀くじで決まったことだ。

「夏休みの間に反省したんだよ。」

「反省？」

「おれたちの登校班ってどこか元気なかつただろ。」

「まあ、そうだったかな。」僕は曖昧に返事をする。確かに元気はなかったような気はしていた。先頭を歩く修二を筆頭に皆が下を向いて歩いているような登校班だった。会話も一つもない。ただ、学

校までRPGゲームの歩行のように勇者に黙って付いていくパーティ
イみたいだった。

「だからさ。」修二は軽やかに言う。「おれが元気をあげようかな
っと思つて。」

「元気をあげる？」僕は修二の突飛な言葉に首を傾げた。

「皆に元気あげるんだ。それが、班長の役割なのかもしれない。」

「学校まで無事に統率をするじゃないのか。」とは言わなかった。

「一人、一人に大きな声で挨拶をするんだ。『おはよう』って。

難しいことじゃない。」修二は誇らしげに言った後「そう思わない
か」と同意を求めてきた。

「そうかもしれない。」僕は調子を合わせる。

「やっぱり、そうだよな。」修二は僕の同意で確信を得たように頷
いた。

それから、修二は班員が来るたび大きく手を振って挨拶をして迎
えた。たじろぐ人間もいれば、愛想笑いを浮かべたり、いぶかしむ
表情をしたりと、反応は様々だった。

出発前に「盛り上がって行きましょう。」と大きな声で挨拶をす
る修二に「たかが登校で何を盛り上がるのだ。」と言う人間は誰ひ
とりといなかった。

この日の集団登校は劇的な変化は見せなかったが、心なしか、い
つもの登校よりも皆上を向いて登校しているように僕には見えた。

外国人上司の実力

机に鞆を置くとほぼ同時に「オッス。」とやかましい声が聞こえた。僕は無視して椅子に座る。

「おいおい、無視するなよ。寂しいじゃんか。」

隣の席に座りながら隼人が口を尖らせた。

『そうよ。無視されるのは寂しいのよ。』

唯子も続いて言った。唯子の声を聞かされた時に、僕の胸に黒い塊のような憂鬱が芽生え、それが鬱々たる気分にする。

「はあ。」僕はその憂鬱に耐えられずため息を吐いた。

『どうした？ 気持ち悪いのか？ 保健室行くか？』

「いや、大丈夫だから放っておいてくれないか。」

僕は心配する隼人に無遠慮に言う。すると、隼人はきよとんとした顔になった。

『ああ、可哀そうに。せつかく、心配してくれているのに、あんなこと言っちゃって。シヨック受けているわよ、彼。』

唯子が僕を非難する。

『シヨックなんか受けるもんか、こいつは変人で有名なんだ』と僕は心の中で言い返す。

『あつ、反応してくれた。嬉しいな。』唯子が喜ぶ。僕は思わず、しまった、と舌打ちをする。

そこで「ああ。」と隼人が気を取り戻すように言った。そして、椅子から立つと僕の肩を叩いた。

「明日死ぬ。やっと、出会えたんだろ。」

「はあ？ なんだよそれ。」僕は隼人の手を振り払う。隼人は僕に払われた手を眺めて「あれ？ おかしいな。」と首を傾げて心底不思議そうな顔をした。「おかしい、おかしいぞ。」と繰り返している。

「おかしいのはお前の頭だ。」

「違うんだ。」

「違うくない。お前の頭はおかしい。」

「馬鹿いうな。この髪型は美容院『ネパール』で切ったんだぞ。」

「えっマジで？ 『ネパール』」

「髪型ではなく、中身だ」と非難するより先に驚いた。これは本心からの驚きだった。僕達の住む市内にある美容院で、県外からネパールに髪を切りに行く客も珍しくない。噂ではあるが、予約が半年先まで埋まっているらしい。

「それ、ネパールなのか。」

「ああ、そうだ。」隼人が胸を張る。

なるほど、よく見れば気品があつて、センスを感じる。なんて、ことはない。

「ネパールといえども、万能じゃないのか？ それとも、そもそももたいたことないのか？」

「なめられたんだ。」隼人が苦々しく答える。「小学生だと思われて、なめられたんだ。あの、美容師は本気を出さなかった。出し惜しみをしたんだ。」

「せっかく、半年も待ったのに。残念だな。」と僕が言つと「いや、半年も待っていない。四ヶ月だ。噂より三分の一少なかった。」と言つので、おかしかった。

「そんなことよりもだ。」隼人が大きな声を出す。「おかしいんだよ。」

「なにが？」

「聞いてくれ。寒太郎。」

「さつきから聞いているよ。」

「昨日、見たんだ。昔のドラマを。」

「それが？」

「憧れの仕事に就いたOLが失敗だらけなんだよ。なにをやっても駄目。同期の仲間と比べて自分はどうして、こんなこともできないんだって泣いているんだ。」

「へえ、憧れの仕事ねえ。」

「ああ、一昔前のドラマだからな。」と隼人は笑う。「それでさ、上司がやって来るんだ。その上司が外国人なんだけど。」

「外国人？」

「ああ、日本語が上手く喋れないんだ。」

「日本語も喋れないのに偉くなれるのか？」僕は堪らずに訊ねる。

「きつと日本語が喋れなくとも実力があるんだ。それで、その外国人の上司がOLの肩を叩いてこう言うんだ。『アシタシネ。ヤット、デアエタンダロ。』って。意味わからないんだけど、それでOLの目が潤むだよ。」

「目が潤む？」

「そのOLはツンデレだったんだ。その言葉に感動して、デレを見せるんだ。」

「とても、感動する言葉には聞こえないけど。」

「でも、OLは感動するんだ。そして、外国人の上司に身を委ねるんだ。」

「身を委ねる？ それは、一体どうゆうドラマなんだ？」

「さあ？ 父ちゃんのDVDなんだけど、それが面白いんだよな。」

僕は返す言葉が見つからず、途方に暮れていると隼人が「もしかしたら、寒太郎も感動してくれると思うんだけどな。」と言い出したので僕は困った。そして、隼人のお父さんに同情をする。

「今度、家に来いよ。見せてやるから。面白いぞ。」隼人が得意げな顔で言った。隼人が「興奮するぞ」と言わなかったのがせめての救いだった。

共同遺伝子

家に帰ると机の上に一枚のプリントと一通の手紙が置いてあった。何気なく手紙を手取る。

「僕は君を天国には連れていけない。地獄に送ることもできない。でも、執着させる目標を作れるかもしれない。」

「なんだ、これは？ ラブレターか？ 昔、父が書いたラブレターかもしれない、と想像した。だが、プリントを見たときに、違和感を覚えた。」

「天国も行ったこともない奴が天国を語ったところで信憑性はゼロだ。他人に自分の妄想を喋っているだけに過ぎない。」

ふいに聞こえてきた声にビクつく。ドアに目を向けると父がいた。父は僕に部屋にズカズカと入り、ベッドに座って胡坐をかいてくつろいだ。

「悟りを開いた人間にしかわからないことがあるのかもしれない。」
僕が父に向かって言う。別に僕は天国・地獄の存在を信じているわけではないし、天国に行ったこともない神父に天国に行くはずもない人間が吹聴されることに居た堪れない気持ちになっているわけでもない。ただ、天国・地獄はともかく、無以外になにかあるのではないか、と考えていた。

「悟りを開いたところで天国には行けない。」父が即答する。

「でも、無以外になにかあるかもしれないじゃないか。」僕は鼻息を荒くした。すると、父はあっさり「そうだな。」と頷いて肯定した。

「そうだなって・・・」僕は父があまりに素直に認めるので「本当にそう思っているわけ？」と疑ってしまう。

「別におれは天国・地獄があるなし、はどうだっていいんだ。」

「でも、さっき否定していたじゃないか。」僕が指摘する。

「違う。天国・地獄を否定したわけじゃない。」父が嫌な顔をする。

「おれは生きている人間が天国を夢見るのが嫌なんだ。いい子にしていれば天国に行けますよ、とか。ああゆう、生きている間が天国までのプロセスと考えるのが馬鹿だと思う。一人の人間が生きていられる期間なんて歴史から見ればほんの一瞬だ。そこで、自分の使命を見つけ、それに勤しむ人間がおれは好きだ。」

「自分の使命ってなに？」

「なんだっていいさ。一人の女は一生を掛けて愛す、とか。ダンスの道を極めるとか。錬金術・魔法だってなんだっていい。」

「じゃあ、父さんの使命はなに？」

「たいして興味があつたわけではなかつた。だが、これだけ偉そうに語っている父に対して息子としてこの質問をしなければいけない使命感に襲われ訊ねた。」

父はそこで顔をほころばせる。「詩だよ。」と僕の予想通りの答えを嬉しそうに答える。「おれは世界を変えるんだ。詩で。」

「変えるって具体的にどんな風に？」僕は聞き飽きた父の台詞に半ば呆れて訊ねる。

「もちろん、おれがいたってゆうふうにさ。おれが死んでいなくなつても、おれがいたってことがわかる世界に変えるんだ。」父はそれを自分の天命だと言った。「おれはおれを残す為に生まれたんだ。いつだって生き物は自分の遺伝子を残すことを念頭に置いて生きている。」

「でもそれなら、おれや愛梨が生まれたんだから遺伝子を残したといえるじゃないか。」僕は疑問を父にぶつける。遺伝子を残すということは、自分の子どもを作ることではないのか。

「確かに、寒太郎と愛梨という遺伝子を残したと言えるかもしれない。でも違う。」

「なにが違うの？」僕は父に言っていることがわからなくて、戸惑った。

「寒太郎と愛梨はおれと由香の子どもだ。いわば共同作品と言ってもいい。さらにいえば、三人の共同作品だ。」由香とは当然母の名

前だ。

「三人？」

「おれと由香。そして、寒太郎、愛梨だ。譬えるなら、おれが作詞。由香が作曲。歌が寒太郎、愛梨だ。おれ一人の純粋な遺伝子じゃない。」

僕は呆気にとられ言葉が出なかった。

「おれはおれの純粋な遺伝子を残して、それを世界に響かせたい。それがおれの生きる意味だ。」父は高らかと言った。

任務遂行者の微笑み

「それで、だ。」父はベッドから立ち上るとプリントを手に取った。
「これ面白いだろ。」

「面白くないよ。意味がわからない。」

「おれは別に魔法を薦めたいわけじゃない。でも、これに参加してもいいんじゃないか。」父は僕にプリントを差し出す。プリントには『未来を変える魔法教室』と大々的に書かれている。僕は魔法など始めるつもりもない。なので、当然魔法教室には行かない。だから、プリントは必要なし、いらぬ。よって「行かないよ。」と僕は首と手を横に振った。

父は苦々しい表情をする。そして「なんで行かないんだよ。」と口を尖らせた。

「別に興味ないし。」面倒なので短く言う。

「それで人生楽しいのかよ。このままじゃ、気が付いたら五十なんてことになるぞ。」

「五十のおじさんにだって、まだ人生はある。それは五十のおじさんにたいして失礼だ。」

「失礼なんかじゃない。希望は言い換えれば未来への嘘だ。時間が過ぎてなにが嬉しい。死へ一秒ずつ近づいているだけだ。今の台詞で五十のオヤジが怒るとすれば、それは若さに対する僻みだ。」

「違う。そのおじさんは自分の人生が無駄じゃなかったと誇っているんだ。どんな辛いことが起きても逃げ出さなかった自分の人生は無駄ではないと信じて疑わないんだ。」

「そんなオヤジなら、おれの言うことをさらっと受け流すさ。なんでも言い訳したがるのを後ろめたさがある証拠だ。人生なんて自分だけに価値がわかればいい。人生なんてそんなものだ。」

「じゃあ、なんで父さんは自分の詩を残したいの？ 世界を変えたいの？ 自分を残したいの？」僕は父の矛盾点を指摘する。自分だ

けに自分の人生の価値がわかればいいなら、詩なんて残さない。世界なんて変えようとは思わない。

「それは、おれの挑戦だ。天命だ。」

「挑戦？ 天命？」

「だから、言っただろ。おれが世界を変えようとするのはおれの人生を掛けた挑戦だ。矛盾に聞こえるなら、それは神を信じていないおれは、この天命だけは信じているということだ。」父はあっけらかんと言った。

「だからって、おれが魔法教室に行けって言うのは可笑しいんじゃない？」

「違う。おれが言いたいのは、寒太郎が人生をつまらなさそうに過ごしていることだ。なんでも、客観的に物事を見て、自分には関係なさそうにしていることを指摘しているんだ。」

「つまらなさそうになんかしていない。」僕は否定する。僕は物事を客観的に考えることは必要だとは思っている。なんでもかんでも自分の主観で物事は言うことは好きではない。第一主観ばかり言う奴の言葉には説得力がない。相手を説得するにはそれだけの客観的要因が必要であるからだ。でもだからといって、僕は物事対して一歩引いて客観的になっっているわけではない。友達と野球をすればチームが勝つように一心不乱になっただけでプレイする。チームの為を思っただけでノーアウト二塁のチャンスで打点を付けるチャンスであつたとしても、僕は自分の気持ちを押してまでもバントをする。それは、チームの為を思っただけ。相手チームの気持ちを考えれば一アウト三塁にはしたくない。スクイズの警戒も必要だし、犠牲フライもやっかないだ。僕はそこまで考えてバントをする。例え、そのあとの打者が打点を付けても恩着せがましいことも言わない。でも、自分には関係ないとも思っていない。僕は僕の役割を考えてプレイしているのだ。父の言葉を借りるなら天命を受けてしまったのだろう。あの場面で天命を断って三振をする奴もいる。タイムリーを打てばベース上で格好良くガッツポーズをする権利も魅力的である。けど、僕は

素直に天命を受け入れてバントをする。それは、チームが勝つ可能性を一パーセントでも上げる為だ。それが、チーム内での僕の役割であると僕は信じている。

けど、今回の魔法教室は魔法に興味のない僕の役割ではない。だから断つたのだ。それを、人生をつまらなさそうにしているとは、とんだ言いがかりだ。

「おれは人生楽しいよ。勝手に決め付けないでよ。」

「寒太郎は何の為に生きている。」父がおもむろに言った。「生きる目的はなんだ？ あるのか？」

「そんなの必要ないんじゃない。生きていればそれでいいと思うけど。」

「元気任せに、生きていくのか？」

「別に元気任せってわけでもないけど。」

「寒太郎はきつと魔法への天命を受けたんだとおれは思う。」父が唐突に言う。

「・・・なにそれ？」

「寒太郎は特別な石に触れてしまったんだろう。」

「特別な石？」僕は口に出してから思い出した。『大丈夫だ。石は割れていない。』との忌々しい声が耳に蘇り、その後にあの不気味に光る石を思い出す。

「ああ、特別な石だ。きつと、その石が寒太郎に天命を与えてくれたんだ。」

「なにを根拠に？」

「そんな面倒なものはないよ。おれの勘だ。」

「石が与える天命ってなに？」

「それは、魔法教室に参加しろってことだよ。」

「なんで、石に触れたぐらいで、たかが石に天命を受けなくてはいけないの？」馬鹿げていると僕は思う。けど、少しだけ心当りはあった。

「たかが石じゃない。特別な石だ。」父がすかさず訂正する。「あ

の石は本来直の触ってはいけならしいんだ。エネルギーが高すぎるんだって。だから、あの石に触れたのはこの世界で寒太郎だけなんだよ。これはきつと、寒太郎に魔法をやれっていうお告げだ。」

「だれが告げたのさ？」

「特別な石だよ。寒太郎は石に選ばれたんだ。」父は嬉しそうに言った。「とても光栄なことだ。」

「相手は石だよ。全然光栄じゃないよ。」僕はそう答えながらも唯子が僕に取り付いた原因がわかるのではないかと思った。

「とにかく行くんだ。きつと、天命が見つかるさ。」

「わかったよ。行ってみる。」僕は普段だったら断っていたかもしれないが、唯子のこともあるので行くことにした。唯子の原因が魔法にあるなら、退治する手段もあるかもしれない。

「そうか。」父は僕の返事を聞くと、嬉しさよりも安堵の表情を見せた。

「けど・・・」と僕が口を開く。「これだけは信じてよ。」

「なにを？」父がきよとした顔をする。

「おれは人生楽しいよ。つまらないなんてことはない。」

父はそれを聞くと余裕のある笑みを見せた。「それは本当の人生の楽しさを知らないからだよ。」

「本当の人生？」

「『井の中の蛙大海を知らず』だ。幸せを知らない奴は不幸を感じない。美味しい者を食べたことある奴は不味い物を判断できる。上には上があるんだ。寒太郎は人生の目的知らないから楽しい人生を知らない。つまらない人生だということに気付いていないんだ。自分が不幸だと気付かない奴と同じだ。自分が不味い物を食べていることに気付かない奴と同じだ。」

「おれにだって目的ぐらいある。」僕が反論する。「幸せとか、美味しい物とかは人の主観なんだから、それを否定するのはおかしい。それに、おれの人生がつまらないとか、勝手に決め付けないでほしいし、放っておいてほしい。おれの人生はおれなりに楽しいよ。」

僕は僕なりに人生を充実させているつもりだった。目的だってある。野球をすれば相手チームに勝つという目標ができるし、テストをすれば百点を取るといった目標が生まれる。一方的に生き方を否定されるのは腹が立った。

「自分で楽しいなんて言う奴の人生なんて高がしれているよ。」

「高がしれている？」僕は反論するよりも意味がわからず聞き返してしまった。

「人生には楽しさよりも使命感が必要なんだよ。世界から戦争を無くしたいと思つて生きるんじゃない。世界から戦争を無くさなければいけない、だよ。優勝をしたいじゃない。優勝をしなければいけない、だ。人生の充実感や楽しさは使命感が作る副産物だ。本当に人生を充実させている奴の台詞はきつとない。きつと満足そうに微笑むだけだよ。きつと、言葉にしなくても自分の人生を語るだけのなにかが結果として残っているんだ。」

父はそう言う魔法教室のプリントを机の上に置いて出て行った。僕は仕方なくプリントを手にとって目を通す。魔法教室の開催日は明日の十時からだった。明日は九時から小学校のプールだ。僕は仕方なくプールを休む決意をする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1132u/>

魔法VS錬金術

2011年7月8日03時28分発行